

擧げられたる康熙字典備考、若くは錢大昕の養新錄等の如き清朝學者の手に成れるものより以前既に明代にもこれあり、即ち陳士元の如きは其の諸史異語解義の遼史兵衛志の條に於て、「韻書無乂、疑是糺字」と記せり、此の如く明代既に其の音を失ひ、清朝に及びても金石、音韻の學をはじめ、史學に精通せし錢大昕以下、遼金元史に造詣淺からざる諸學者が定むるに由なく、従がつて見るに由なかりしなるべき此の字の音に關する資料を獨り邵氏が占有して此の音注を施せしとは、疑惑の眼を以てすれば之を疑ひ得ざるに非ず、更にまた學士の説かれたるが如く錢氏が元史類編を涉獵するの間邵氏の此の注解に眼を曝さざることなかるべきに、然も一言も其の可否に論及せず、たゞ「字書無乂字云々」(養新錄中。諸史拾遺卷五)とのみ記せるについても一考すべき要あるべし、思ふに「乂音杳」なる邵氏の音注はたゞ「乂」字の偏なる「エウ」によりて獨斷的に之を定めたるものには非るなきか、而して錢氏の如きは或は之を觀破して遂に此の音注に就いて一も言議を費さざりしに非るなきか、ともかく何等の根據を提示せざる此の音注に對しては然く之を重要視すべき要なかるべし。

學士は「乂音冥」なる邵氏の説に對しては之れを閑却せざるに止め、別に此の字に *tu* (*tyu*, *ti*) の音あるべきを推定せられたり、其論據は彭大雅の黑韃事略に「五十騎謂之一糾都由切、即一隊之謂」とあり、而して「糾」字には都由切即ち *tu*, *tyu* の音なければ、想ふに此字はもと「乂」に作りしを傳寫の際先づ誤りて「糺」に作り、後「糺」「糾」相通用するを以て、今本にては糾に作れるなるべく、従つて「乂」字は *tu*, *tyu* の音を有せるものなるべしと推定せられたると、又別に金史に迪斡群牧なる文字は一に乂斡群牧と作られたれば、迪と乂とは音相通ずるものなるべく、従がつて「乂」には *ti*, *tik*, *tek*, *chök*, *teki*, *djaku* と大同小異の音ありしなるべくとせられたるにあり。此の説